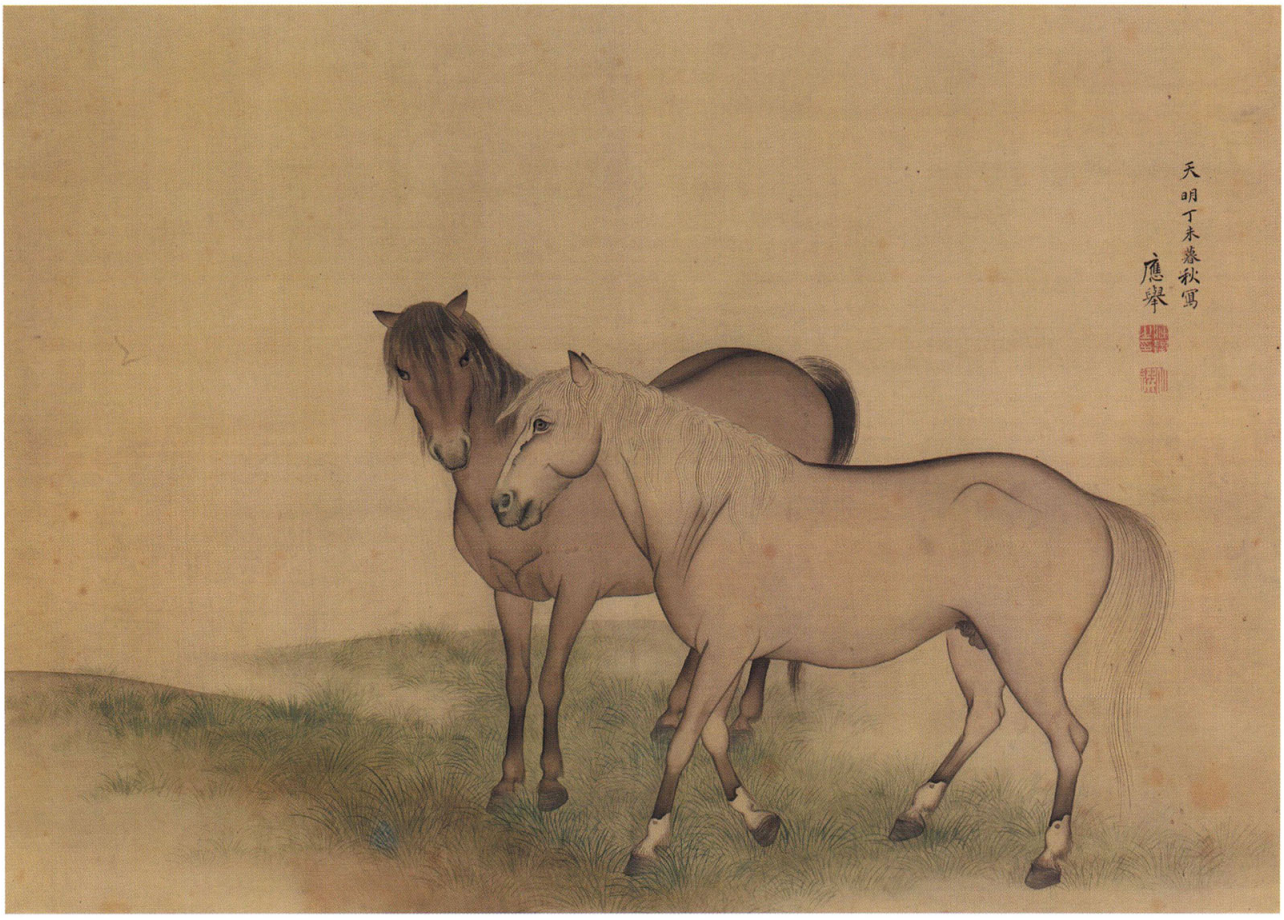

14　馬之図

円山応挙　　一幅

天明七年（一七八七）
絹本着色
本紙五六・二×七八・八

仲むつまじく寄り添う二頭の馬を描く本図は、写生を基本として描かれた穏やかな姿の馬を伸びやかな筆線に片量かしや付立ての技法を交えて描いている。

円山応挙（一七三三～九五）が本図を描いた天明七年（一七八七）は、応挙五十五歳。この年、応挙は、三月には南禅寺帰雲院の障壁画を、夏には金刀比羅宮の襖絵を、さらに十二月には大乗寺の襖絵を描いた。光格天皇の兄である妙法院真仁法親王（一七六八～一八〇五）との交流が盛んになっていった年でもある。そして翌年、京都の文化人等を紹介する『平安人物志』の画家の部でその筆頭に位置づけられ、京都画壇の第一人者として認められる存在となった。多くの弟子を抱え、彼らもそれぞれに育って、応挙を頂点とする円山派が形成されつつある充実期を迎え、さらにその画風が洗練されつつある時期の佳品である。

本図は、明治四十年（一九〇七）、嘉仁親王（のちの大正天皇）が九州四国地方に行啓の折、島津家より献上された作品である。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

駒競べ（こまくらべ）——馬の晴れ姿
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 73

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年七月九日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan